第２４期日本学術会議・第１回行動生物学分科会議事録

日時：2018 年 3 月 22 日 13:00～14:40
場所：日本学術会議 5 階 5C-(1)
出席者：辻（世話人、司会担当）、岡ノ谷、友永（書記担当）、長谷川(寿)、平田、仁平、明和、渡辺
陪席：山石

※役員の選出までは、第 23 期の委員長であった辻が世話人として会議の司会進行を務め、幹事であった友永が書記を務めた。

議題

（１） 役員の選出について

委員の互選により、会長に辻、副会長に岡ノ谷、幹事に友永が選出された。全員前期からの再任。以後、改めて辻が司会進行をし、友永が書記を行った。

（２） 今後の活動について

辻委員長より、第 24 期の行動生物学分科会の設置目的と審議事項についての説明があった。設置目的は、「行動生物学とその関連分野に関して、今後発展すべき分野、発展の障害、などを特定し、必要な科学行政の施策について審議するとともに、分野の成果を社会に発信する」とし、審議事項は、「１．国民の科学リテラシー向上と行動生物学、２．行動生物学における新技術、３．学際的交流と行動生物学、にかかる審議に関すること」とした。また、第 23 期の活動について、マスタープランに「インターネット・オブ・アニマルズ」が採択されたが、重点学術大型研究計画には選ばれなかったこと、期間中シンポジウム１回、サイエンスカフェ２回を実施したこと、2016 年 7 月に日本生物教育会と情報交換を行ったことなどが報告された。

続いて、今期の活動に関して、参加委員より意見を聴取し、議論を行った。主な意見は以下の通り。

・行動生物学自体が弱体化している。
・初等・中等教育への展開が不十分。
・ヒトも含めた形での行動生物学の視野の拡大が必要
・ミクロなプロセスとマクロな行動をつなぐための新しい技術が必要
・行動計測の新技術が必要（たとえば、自動画像処理、機械学習、ドローンなど）
・そもそも「行動」の基礎研究自体の存在感が著しく低下している（たとえば、学習心理学など）
・高校の生物教員との交流が不十分であった。進化生物学などを授業に導入したいと積極的に考えている教員を分科会に招いて意見交換をしてはどうか
・行動生物学の衰退は大学教員ポストの減少という形で明確に表れている。

・この傾向は、密接に関連する心理学においても同様である。
・公認心理師のような国家資格においても動物心理学、行動生物学、マクロ生物学の重要性を今後つよくアピールしていかなくてはならない（次のカリキュラム改定に向けて）
・高校の教科書については行動関連学会と連携して指導要領に乗せるべき必須項目の検討を行い、積極的に提言していくべきである。
・マスタープランについては、自然史博物館構想との連携も進めていく必要があるのではないか。
・サイエンスカフェについては、東京のダーウィンルームや京都の町屋などでの開催を視野に入れる。とくに、次回の日本動物行動学会(9/28~30)は京都で開催されるので、その時期に合わせての独自開催を目指す。
・サイエンスカフェの方法を再考すべき。新しいやり方はないか？ 科学コミュニケーターと連携できないか？
・ヒト動物の関係という枠組みでの行動生物学の可能性。
・持続的発展や環境変容の中での行動の変容（レジリエンスも視野に入れて）
・社会への貢献を強調するだけでなく、真理探求型の学問であることも主張する。
・指導要領案の作成と並行して、「教科書」的なものを出版してはどうか。モデルはブルーバックスで最近よく出版されているタイプの「教科書」。
・メディアコンテンツとの連携（QR コードなど)、電子書籍化によるリンク、など。
・生態科学分科会でも同様の問題提起があった（生態学の中での進化生態学の地盤沈下)。
・動物行動学者の危機意識の低さ。
・ヒトの行動を研究する文科系と連携の重要性、特に心理学などとの連携。
・大学間の連携で「行動生物学研究センター」のようなものを作れないか。

以上のような意見を踏まえた議論の中から、今期の方針として以下を進めることが決まった。

１．高校生物指導要領における行動生物学の必須項目の作成および、それと並行した、高校生レベルを対象とした行動生物学の「教科書」的な書物の出版。→辻委員長を中心に進める。長谷川両委員からも出版面でのアドバイスを得る。
２．2018 年度内にシンポジウムを開催する。テーマは「共感」。今年度で終了する新学術領域「共感学」を基盤として、幅広いスピーカーを集める。担当は長谷川（寿)。
３．サイエンスカフェの実施。まずは 9 月の動物行動学会に合わせて京都で実施する方向で検討する。